慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八二号）

目次

病床慰問の書簡……近角常観……(1)
聖人の信仰と道徳……福島政雄……(5)
蔭に咲く花……向島諦宣……(9)
世の人は皆近視だ……安波勲八……(12)
念仏詩抄……木村無相……(15)
池山先生を憶う……花田正夫……(20)
ともしび……聚墨生……(23)

第二十四巻　第十一号

病床慰問の書簡

（一）

近角常観

安波さん、遇々行信を獲ば遠く宿縁を慶べとの聖訓は、死に直面して大安心して居らるるあなたの生命であります私もあなたの「入信の径路」を拝見して数年前の結縁を慶びます。彼の帰りの時、今日の事あらんとは夢にも思わぬことでありました。しかし御縁なかりせばと思えば如何にも宏大なる御恩を感謝せずには居られませぬ。

たまたまという字は、遇々という文字が書かれてあります。

本願力にあいぬれば　むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みち〳〵て　煩悩の濁水へだてなし。

嗚呼弘誓の強縁は多生にも遇い難しとも、遇いがたくして今遇うことを得たりとも、遇々浄信を獲ば是心顚倒せず是心虚偽ならずとも仰せられてあります。お互に如来の本願に遇い、聖人の御教化に遇いたてまつりたことを慶ばねばなりませぬ。行信を獲るというは如何にも味深き仰せである。この行信に帰命したてまつれば摂取して捨てたまわずとも仰せられてあります。この頃私は

弥陀の名号となえつつ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　仏恩報ずるおもいあり。

という和讃を拝誦して、この行信を仰せられる味いをいただいて居ります。聖人が「教行信証」に、謹んで往相の廻向を案ずるに大行あり大信あり、と仰せられて二つならべてあることが今更の如くありがたい。

あなたも定めて食物も喉を通らぬ御不自由のことと思います。これがために、わざ〳〵作りて与えたまう御粥、重湯が南無阿弥陀仏の行であります。その親心、即ち選択本願をいただくのが信であります。お粥をたべながら親心をいただくのであります。親心を頂けば御粥をたべずにはいられないのであります。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんと思いたつこころの起ることもただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰

せをこうむりて信ずるとも仰せられた。かくてこそ念仏成仏これ真宗ということが一入ありがたい。

○念仏成仏これ真宗　萬行諸善これ假門
権実真假をわかずして　自然の浄土をえぞしらぬ。
○五濁悪世のわれらこそ　金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて　自然の浄土にいたるなれ。
○信は願より生ずれば　念仏成仏自然なり
自然はすなわち報土なり　証大涅槃うたがわず。

これ等の和讃に無上の法悦を感ずるのであります。

他力真実のむねをあかせるもろ〳〵の聖教は本願を信じ念仏を申さば仏になる、というは、顕浄土真実教行証文類ということで、恐らくは、念仏成仏是真宗という一語よりあらわれたものと思います。虚假不実の我等をお見捨てなき他力真実のむねをいただきて念仏が自然にあらわるるのが真宗であります。

この自然の念仏がありがたい。特に自然の浄土、自然の報土がありがたい。世の中には念仏称えても自然でなかったり、御浄土参りを口にしながら、いよ〳〵という場合に自然の浄土でないことが現われる事がある。これが権実真假の分れめかと思えばよく〳〵の御縁を慶ばねばならぬ。

しかし自然の浄土といえばとて、此世ながらに法性真如のさとりをひらくことと思うてはならぬ。聖人は惑染の凡夫、この世界に於て性を見ることあたわず、煩悩のために蔽わるるがゆえにと仰せられてある。もし此世に於て煩悩悪障を断ち尽して見性了心するならば、すなわち仏である仏のためには五劫思惟の願はいらぬのである。名残り惜しくおもえども娑婆の縁つきて力なくして終るまでは煩悩具足の凡夫である。併し命終るとき法性の覚月すみやかにあらわれて尽十方無碍の光明に一味になるのである。

○煩悩具足と信知して　本願力に乗ずれば
すなわち穢身すてはてて　法性常楽証せしむ

多くの有縁の方々が報土の彼岸に往生したまいて穢土に残れる私を悲憫したまうことを思えばまことに慚愧のいたりである。池山夫人の如き、かの蓮華蔵世界よりこの煩悩生死の園林に執着せる私をみそなわすことであろう。安波さん、あなたも御親父と同じく無為（むい）の都に実を結ばるること遠くはあるまい。しかし或人の歌に

明日の夜は照りますものと知りながら
入るさの月の惜しくもあるかな

いかにもお別れ申すもつらいことであります。まして御妻子の芳契いかばかりと御察し申します。されど今生夢の中の契りをしるべとして来世さとりの前の御縁を結ばせていただくのであります。前なるものは後を導き、後なるものは前を訪い、同一念仏なる道故、四海兄弟の身にしてい

ただいた宿縁を慶ぶの外ありませぬ。南無阿弥陀仏。

大正十五年　八月十一日　近　角　常　観

安波勲八殿

（二）

拝復

貴書拝見、御妹様ご危篤の由、皆々様御心配の御事と存じ奉り候。

さて御妹様には親兄弟にわかれて未来に赴くは心細しと仰せられ候由、御もっとものいたりと存じ候。この際よろこばれぬと仰せられ候も、ごもっとものいたりに候。

歎異抄の第九章に

「念仏申し候えども踊躍歓喜（ゆやくかんぎ）のこころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土へまいりたきこころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」

と、唯円房がたずねられし時、親鸞聖人は

「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこころにてありけり」

と、仰せられ候。御妹様も聖人もご同様もみな同じこころに候。

さて、その次に、

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。

よろこぶべきこころをおさえてよろこばせざるは煩悩の所為（しょい）なり。しかるに、仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

と仰せられ候。よろこべぬことを妹様ご心配なされ候は御もっとものいたりに候。されどよろこべぬは煩悩のためなれば、そのよろこべぬが可哀想と御思し召し下され候が、仏の御慈悲にて候。たとえば天災地変の時、御内帑金（ごないどきん）が下り、御使者がご見舞い下され候時、十分御丁寧にご接待出来ぬ、申しわけなしと心配する時、先方の仰せに、天災地変で難儀するのをあわれみ思し召す陛下の大御心なれば、若しや接待が出来る程なれば天災地変でないかしらんとあやしく思う、天災地変の時はよろこべぬのが当然なり。よろこべるぐらいなら御見舞は不用なり。生々世々の別れなれば喜ばれぬのが可哀想と仰せられ候。

歎異抄の次の御文に

「またいそぎ浄土へまいりたきこころのなくて、いささ

かの所労（しょろう）のこともあれば死なんずるやらんと、こころぼそくおぼゆることも煩悩の所為なり」

と仰せられ候。御心細い妹様のおこころを可哀想と思し召され候が、如来様の仰せに候。

次の御文に

「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里（くり）はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことによくよく煩悩の興盛（こうじょう）にそうろうにこそ、なごりおしくおもえども娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、彼の土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこころなきものを、ことにあわれみたまうなり」

と仰せられ候。

或る人から「なごりおしくおもえどもちからなくして終るとき、念仏の申せずともよろしきか」とたずねられ候節、私は

「申せないのがもっともじゃ、病苦のために申せないのをことにあわれみたまう御慈悲に候」

と申し候。御妹様も、こころぼそい、よろこべぬ、称えられぬのを、ことにあわれみたまう御慈悲に候えば、ご安心なさるべく、よろこべるくらいならば、憐みたまう御慈悲はいらぬとのことに候。

妹様のみならず、皆様とてもこころぼそくてよろこべぬこととと存じ候。そのよろこべぬこころを可哀想と思し召され、お見捨てなき御慈悲に候。

かく聴聞すれば喜べそうなものと思し召され候えども、ドコドコまでもよろこばれぬ、あさましきものを見捨てぬといったら、飽くまで見捨てぬとの仰せに候えば、よろこぶ、よろこばぬなどいうことに目をつけず、よろこばれぬものをお見捨てなき御慈悲をいただき下されたく候。

御存命中にと存じ乱筆ながら右申し上げ候。早々。

近　角　常　観

吉江作太郎　様

御　妹　様

皆々様ご心配のことと存じ候。悲しいこころをあわれみて御見捨てなき御慈悲をいただき下され度候。

聖人の信仰と道徳

福島政雄

親鸞聖人の信仰の上からは、道徳の問題はどうなるのであるか、その御教をいただいて居る私自身としての考えや味わいを少しく申し述べて見たいと思います。

聖人の御教の道を辿るように私の心がはっきりときまったのが、二十六歳の夏七月からでありました。その心機転換の直後の頃であったと記憶しますが、或るキリスト教会の副牧師をしていられた若い方が、特に私を訪ねて来られまして、歎異抄に対するその方の感想を語られたことがありました。歎異抄はあれほどの短かいものに信仰の心持を非常によく述べられている。キリスト教の方には此のようなものは無いと云って賞揚せられました。併しそのあとで申されますには、ただ惜しいことには歎異抄をいくら読んでも、人間としてふみ行うべき道徳のことは述べられていない。この点から歎異鈔いな仏教全体が如何にも消極的な教えと感ぜられる。人間は天上の月影を宿している露のようなものであって人間そのものに光はない。このような仏教の教には満足することが出来ないと云われました。

この言葉に対して当時の私は何とも答えることが出来ませんでした。私はまだそれほど仏典に親しんでいなかったのであります。その後私の二十九歳の時に、三好愛吉先生にお目にかかりました。先生が皇子方の傅育（ふいく）官長をしていられた頃であります。先生は濶達な仏教思想の人でありました。私は始めてお目にかかったのでありましたけれども、三時間ばかりその御宅の応接室にすわり込んで先生のお話を承ったのであります。その時私は仏教と道徳の問題を持ち出してお尋ねしたのであります。先生は言下にお答えになりました。

それが仏教の徹底的なところであって、仏教ではキリスト教のように信仰以後に人間として行なうべき道は斯様々々であるなどと言ってないけれども、それが仏教の徹底的なところであって、仏教では一念の信決定した上は、すべて仏がなさしめたもうのであり、自分と仏とが一体になって、仏のなさしめたもうがままに実行して行くのである。人間の道徳として一々箇条書にする必要がない。それが仏教の徹底的なところである。此のように先生はお答えになったのであります。

当時若かった私は此の先生のお言葉に非常に感激したのであります。そうだ、仏教は徹底的な教だ、キリスト教のようにこちたく信仰上の道徳を云々したりしてないところに仏教の真面目がある、と大いに愉快になったことでありました。

併しその後次第に仏典に親しむようになりましてから、私の考えが細かになって参りました。キリストの山上の垂訓が若し信徒の道徳を述べてあるものでありますならば、大無量寿経の五悪段は仏教における道徳問題を述べてあると考えるようになりまして、山上の垂訓と五悪段とを比較して述べたこともありました。然るに十年二十年もこの問題を考え、また私自身の生活を振りかえっています間に、両者の根本の違い目に気がつくようになって参りました。

そのちがい目というのは次のようなことであります。キリストの山上の垂訓は非常に烈しい理想主義に裏づけられていて、これに対すれば私などは笞打たれているような感じがします。丁度兄が不良な弟を笞打っているようである、弟は兄の言葉をもっともだとは思いますが、自分がどうにもならない。ただ泣くより外はないのであります。然るに五悪段の趣はよほどちがいます。これはしみじみとした趣がありまして、私自身でも気がついていない私の悪いところや、欠点を親からしみじみと云いきかせられているような感じであります。

不図仰いでその親の顔を見れば、目に一ぱい涙があふれているという趣であります。私はこの親の言葉に接してはただ泣くばかりではありません。自分の根本の暗い姿をまざまざと諦観させられるのであります。

五悪段は仁、義、礼、智、信の五つの道にそむく姿を説かれてあると解せられていますが、五悪段の言葉について考えますれば、第一の悪は殺し合いということが中心であり、第二の悪はだまし合い、第三の悪は男女の乱れ、第四の悪は権力欲、第五の悪は親不孝を始めとして、ばくちや大散財などの悪行が中心となっています。それについてお前の現実の有様は此の通りであると、しみじみ説かれてあるのであります。

此の五悪段が私の身にしみて参りました。最初に私の身にしみましたのは、第五の悪の最初の親不孝のことでありましたが、その後三十代の私は殊に第三の悪の張本人でありました。四十五十となって、私は筆先や口先で世間の人をごまかして、自分が如何にも信仰の人であるかのように

云っている。第二の悪の張本人であることに気がついて参りました。第一の悪については私は三年間ばかり或る人を殺そうと思っていたことがあります。第四の悪については私は若い時から覇気満々の男でありまして、何でも他人に勝ちたいという心で仕事をして参りました。今でもその覇気がなかなかに脱けないのであります。七十歳になれば好々爺になるべき筈でありますが、なかなかそうは参りませんで、相変らず負けん気で仕事をしようという心があります。

此のように五十余年の間に私は自分が五悪段に説かれてある以外の何物でもないということがわかって参りました私自身は毫末も道徳という点で取得はない人間であるということが五十年来次第にわかって参りました。これは私の反省というのではありません。五悪段の仏陀の御説法によって私自身の姿を示されたのであります。

さてこのようになって見ますれば信仰と道徳という問題は如何なりますでありましょう。あの副牧師の言われたことが私の身の上にはその通りであるということになりはしませんのでしょうか。仏教というものは消極的である。自分の罪悪はわかっても、悔い改めて立直るということは無いではないか。仏教はつまらぬ教であるということになるのでしょうか。

或る時、私は近角常観先生に此の問題をお尋ねしました先生は次のようにお答えになりました。我々は煩悩熾盛の凡夫であって、誘惑があれば、それに強くひかされて誘惑に負けそうになる。そのような我々の有様を仏陀はかねてしろしめして、それだからなおお前を憐れむ、可哀想である。憐れむからにはお前のいのちに我がいのちをかけて誠のいのちを徹底させずにはおかない。どこどこまでも汝のいのちに徹するという仏陀の生きたまことがそこにはたらかせられる。そうなれば誘惑に負けそうになっている身もその仏陀のまことに融かされて誘惑から離れるようになる。道徳は自分が立派でこれを行なうというのではない。あくまでも仏のまことただ一つによって自分の煩悩が融化せられ転ぜられて行くのである。そこに人間の道がある。

此の近角先生のお言葉は私の身にしみています。さて私自身のことを振りかえって見れば、さすがに煩悩熾盛の私も五十歳を超えた頃から少し心が明くるなって来ています。煩悩が無くなったのではない。併し親鸞聖人が仰せられている

「大悲の願船に乗じて光明の広海にうかびぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず」

というお言葉の心持が少しく我が身の上に味わゝれるようになって来ています。それは年令が進むにつれて生命力

が減退してそんなことを感ずるようになったのではないかと云われるかも知れません。併し私の生命力は五十から六十になってもあまり減退はしませんでした。相変らず煩悩熾盛であります。それが至徳の風静かにということを幾分でも味得するようになりました。そこに念仏があり仏陀のひとりばたらきがあると私は感じますのであります。

消極の底に徹して、そこから湧き立って来る力が仏陀のまことであると感ぜられます。私は念仏申そうと思って念仏することは殆んど無いのであります。苦悩の底に落ち込んでいる時に自然と念仏申されて心が和らいで来るというようなことが多いのであります。天地を貫ぬく仏陀のまこと、それが私のいのちに通っているのであります。私は道徳の人ではないのであります。偽善者であり、やくざ者であります。偽善者になろうと思っているのではありませんが、為すこと云うことがすべて偽善ということになって来るのであります。しかも私は鉄面皮な様子で人生の行路を辿っています。あんな奴がと爪はじきする人も多いでありましょう。その私がもはや八十余年というながい間、色々の方々のお哺みやお育てによって生きて来ているのであります。おもえばまことにありがたいことであると申すより外はありません。

ここにあらためて歎異抄にかえりますれば、第十六章のお言葉が新たに私の心にひびくのであります。

「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心も出でくべし」

このお言葉を私は近年いよいよ深く味わうようになりました。柔和忍辱ということが私の道徳として体験せられているのではありません。私は若い時からどうも短気でいけないのであります。併しその私に仏陀は柔和忍辱の心を徹底的にそそがれるのであります。柔和忍辱は仏力廻向の道徳であります。

此のように述べて参りますれば、三好先生のお言葉がここに生きて来るのであります。信心の上にはすべて仏がこれを為さしめたもうのであるというお言葉であります。こちたく道徳問題を論じ、善き行について箇条書をしてこれを勧める前に、先ずその根本を明らかにすべきではありませんでしょうか。親鸞聖人の信仰の上から私が感じます人間道徳のことを云えば、斯様のことであり、ここから広大無辺な道徳の世界が開けて来ると思うのであります。

昭和四十七年十月六日

八十三歳、　釈　界雄。

蔭に咲く花

向島諦宣

「ソロモンの栄華も野に咲く一本の百合の花の装いだに及ばず」とは、かってナザレの聖者がその弟子におしえた言葉であった。実に人の世の装いは如何ともあれ、真実なるものの光りは谷間の葉蔭に人知れず咲く一輪の花にもかがやく。

次に掲げる物語りは私の郷里で、私の目前にあった感動すべき実話である。

私の郷里にTさんと云う熱心な女の同行がいる。Tさんの求道の動機は、Tさんのまだ若かった頃一人の幼児を残して、その嫁いだ家から去らねばならなかったという人の子の母として最も悲しい運命を負うたことにあった。悲劇は往々にして弱い性格の人を破滅に導くものであるが、又時には生活力の強い人の心から殊玉にもまして尊い宝を産ましめる助産婦となることもある、Tさんはその後者に属する人であった。

生命にも代え難い愛しいわが子と生別して、悶々の情に堪えかねたTさんは、この苦しい胸の慰めにもなれかしと寺の門をくぐり、法座にも連なるようになった。はじめのうちは寄席にでも行ったような気分で、ぼんやり聴聞していたTさんも、度重なるにつれて機縁が熟して来たものか、生死の大問題という一大事因縁に気付き、それからは、この世の悲しみからその心魂に受けた瘡痍（そういう）の痛みよりも、己が宿業に報いらるべき未来の苦悩の想念が、より強くTさんの心を嚙みはじめ、Tさんの求道聞法の態度は、いよいよ真剣なものとなった。

すべて心魂に致命的な瘡痍をうけながら、なおかつ生きながらえている人には、必ず純粋な宗教的要求が附随して起るものであるが、それは先覚者の指示を待たないでは本人に自覚されずに終ることがままある。今Tさんは幸いにして真実の求道の一念を喚起して、生死問題の解決に専念されるようになったのであるが、悲しい哉「有縁（うえん）の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得

んや」と聖教にもあるように、よきひとに遇い得なかったために、驚くべし！十七年間も不徹底、未解決の不安を人知れずおのが胸に秘めて、悩み続けていたのであった。

ところがこの夏、私が帰国していた時、私の入信を人伝てに聞かれたTさんは、一夜私を訪れて、ひそかに胸の悩みを訴えられた。そしてその眼には恐ろしく真剣なひかりが輝いていた。

「私は長い間、一生懸命に御法を聴聞しておりますが、どうもこれでよいと思うたことはありませんが、どんなものでしょうか？」

私「それは大法を聴いて倦むことを知らずということもありますから、いくら聴かれてもこれでよいと思われることはないわけでしょう」

「いいえ、私のはそんな意味で申すのではなく、ひょっとしたら聞き間違いがありはすまいかと云う不安から、もうこれで大丈夫と云う安心が出来ないのです」

私「それは困りますね、聞き間違いがありはしまいかと二の足を踏まれるようでは、本当に聴いていられない証拠です」

こう云い切った時、Tさんの両眼からは熱い涙がハラハラとあふれた。私は更に語を強めて云った。

「Tさん、よく聴いて下さい。あなたにはまだ本当に慈悲が聞えていないことは事実です。併し法を聞きはじめて十七年になるといわれるあなたが、まだ自分勝手に信心を掴んで安心するようなこともせず、まだこれではまだこれでは！と求められるのはすでにあなたの力ではありますまい。若し聞き間違いがあってはと心配されるのは、実はあなたの心配ではなくして、すでにあなたの胸に宿りました御親が、若し聞き間違いをさしてはとの如来御自らの御配慮ではありますまいか。して見るとあなたがそうして倦まず求めていられる姿のまんまが御親に抱き取られていく姿ではないですか……」

私の言葉が終るのを待たず、Tさんは突然両手を差し延べて

「ああ！このままでしたか！このまま……か！先生」

とそのまま念仏と共に泣き伏された。

やゝあって、Tさんは涙にぬれた顔を挙げて

「まことに有難うございました。お蔭で永々の迷いから瞠めさして頂きました。こんな清々しい気持になったことはじめてです。それにつけても、思い出されるのは私の子供のことです。今の私にして見れば、あの子こそ私をこの尊い御法に導いてくれた善知識です。たとい此の世では因縁が浅くて、親子と生れながら、一緒に暮すことが出来なくとも、せめて何時までも別れることのな

い御法の世界で永遠に結び合い度いと思います。どうか
あの子にも聞かせてやって下さい。お願い致します」と
涙ながらに頼まれるのであった。

世に、子の為に流される母の涙にまさる尊いものがまたとあろうか。それは蒼海の水底に輝く真珠のように、人の子の心の闇を照らす永遠の光である。西欧の古聖オーガスチンをして邪教邪道の迷妄から正教に導きかえらしめたのも賢母モンニカの涙の熱祷であった。又私の母は私の魂の荒み行く暗い影に幾度、慈悲の涙をそそいで下さったことか。今また地上に一人の子を更生せしめんがために、母親としての涙の願いが捧げられている。

親はなくても子はそだつ。Tさんの子Dさんは母親の歎きと共に成育して、今では二十歳の立派な青年になっている。世間をはばかって会う親子の間に交わされる言葉はいつとはなしに御法の話になり勝ちであった。

母親の熱誠に動かされたDさんは、これまで殆んど宗教について無関心であったが、この頃からはじめて聞く気を起して寺の門をくぐるようになった。その間におけるTさんの苦心を思うと、吾等に無上の信心を発起せしめんがための如来の数々の善巧方便を思い起して涙なきを得ない。誠に親なればこそ、子なればこそである。

秋の夜の静寂の中に、Dさんと私とは郷里のさる寺の一室に今晩対坐している。私がDさんと御法について語り合うのはこれで三度目であった。Dさんは仏法を聞きはじめてから今に到るまでの心の過程を物静かに語られる。Dさんは性来感じ易い真面目な青年であった。

「先生私は段々お話を承るにつれて、親の御恩とくに生みの母の私に対する切なる愛情を感じて、涙をもよおすことがしばしばあります。それにつけても、私の母は私故に今まで長い間苦しんで来たのかと思うと、私は母に対して許されない大きな罪を負うていることを感じますどうか少しでも母を安心させてやりたいと一生懸命に尽してはおりますが、私自身の日々の内生活を反省して見ると、全く浅間しいことだらけでお話になりません。私の二三の友人は皆平気な顔をして暮していますから、君達はどういう積りで生活しているのだ。一体君達にはこの人生の意味がわかっているのか！と、一々尋ねて見ましたが、誰一人真面目に答える者すらありませんでした私は一体どうしたらよいのでしょう……」

私「あなたが早く成功してお母様を安心させてあげたいという気持は私にもよく分って居ります。併し同じ親孝行と云っても、あなたの場合は他の人々と少し趣きが違っていないでしょうか。あなたのお母さんのあなたに対

する当面の願いは、あなたが一日も早く真実の信仰にめざめるということです。するとあなたがお母さんに安心と悦びとを与える唯一の道は一時も早く仏法を聞きひらくということの外はありますまい……。

それはとにかくとしてあなたは真面目な性質の人だからあなたの衷心の願いとしては、やはり善いことがしたいでしょう。今まであなたがしたことで、これこそ本当に善いことだと思ったことが何かありますか」

「そう問われますと別にこれと云って善いと思ったことはありませんが、実は先日鼻の治療のため大阪に行って居りましたとき、毎晩病院まで通うことになっていたのですが、ある夜街角の街灯の影にしょんぼりと、小さい夕刊売の子供が立っているのに気がつきました。何となく可哀想になって、私の治療代を投げ出してその夕刊の全部を買い取ってやりましたら、その子供が驚いたような顔をして、何度も〳〵丁寧に礼を云っては嬉しそうに立ち去りました。私は人ごみに消えて行く子供の後姿を見ながら、非常に愉快な気持になりました。それから次の夜も其処まで行くと、また子供が同じように夕刊をかかえて立っていますので、思わず近寄って行きますと、その子も私を見付けて元気よく駆けて参りましたから、二三その子の身上について聞きますと、その子の云いますには、夕刊全部を売って帰らなければ親方にひどく叱られるのだと云いつつ、悲しげな眼差しをアスファルト道の上に落しました。私はその姿が可憐になって前夜と同じように夕刊を全部買ってやりました。その翌晩も、次の晩も、その子の姿を見ると夕刊を買い取ってやらねばならぬような破目になりました。私はとうとう鼻の治療代が全部なくなるまで同じことを繰り返して、碌々治療もせずに帰国しました。併し私はこのことによって未だ経験したことのない悦びを感じました。まあ私が善いことをしたと思うことは、これ位なものでしょう」

私はD君のこの告白に感動されながら次のように云った

「あなたの行動は誠に感心です、普通では一寸出来難いことでしょう。併しそれは世間並の道徳上の評価です。釈尊の教えの鏡にうつるとそれさえも真の善事と云われないのです。仏教でいう布施の行は、施す自分も、施す相手も、施す物も全部空しくされた時、即ち無我の心で行われた時に布施が完うされるのです。もし施し物や施したことにすこしでも執着を感じたらそれは本当の布施といえないのです。あなたの場合、若しその夕刊売りの子が碌に礼も云わなかったと仮定したらあなたは腹が立たなかったでしょうか、或はその子がその金で遊びにつかっていても、あなたは平気でいられたでしょうか。も

し本当の布施であれば相手がそれに対してどんな態度を取ろうとどういう風に使っても問題にならぬはずです。むつかしいことですが、形式だけの布施で、仏法の無我な鏡に照されると、虚仮、雑毒で、本当の善ではないのです。……」

Dさんの顔に、その時あきらかに困惑と苦痛の色があらわれて、次のように口ごもりながら語った。

「そう云われますと、私には一つとして善いことが出来ていません。そればかりでなく、私の生きていると云うことすらがすでに罪悪です……」

私「そうです！経典にも〃かつて一善も無し〃とあるように、本来、無明と我執につきまとわれている私共には純粋の善と云うものが一つもないのです」

「すると先生、私は死んでしまった方がよいでしょうか生きることが罪を造ることならむしろ死んでその罪からまぬかれたい……。」

Dさんの語調は真剣そのものである。

私「いや、いけません！死ぬことも罪です。あなたが自殺されたらあなたのお母さんはどんなにか悲しみ歎かれることでしょう。それを思っただけでも自ら生命を絶つことは出来ないはずです。結局生きることも死ぬることも尽く罪なのです」

対話がここまで進んだ時、Dさんの眼にはすでに熱涙が浮んでいた、その瞬間私はDさんの口から思いがけない言葉がほとばしるのを聞いていたく胸打たれたのである。

「先生、生きていることも、死ぬことも罪悪ならせめて私が死んだら、その屍を野原に捨てて野犬にでも喰って貰いたいと思います」

この瞬間、「我死なば屍を鴨川に捨てて魚に与うべし」との聖人の深刻な言葉がひらめいた。今更の如く宗教の神秘を痛感した。Dさんの言葉と聖人の言葉との不思議な一致は偶然ではない。宗教の世界は超歴史の世界である。なるほど宗教は歴史の上にあらわれながら超絶した永遠の世界から現われるのである。それでこそ三千年近い釈尊の教法が今の私に生きて働き、七百余年を経ている聖人の言葉が、宗教的なものに揺り動かされて、何も知らない一介の青年の口からもれるのである。宗教内容の永遠性！ここに真実の宗教の尊厳さがある。

私「Dさん！全く不思議です〃我が屍を鴨川に捨てて魚に与うべし〃と聖人もあなたと同じことを言って居られる。併しあなたの腐れた肉体はそれで始末がつく、けれどもあなたの罪に穢れたその魂をどうしますか」

と、畳みかけて聞いた時、Dさんは一言もなく其場に泣き伏した。その時、私は思わず

私「Dさん！今はじめてどうしても救われないあなたの姿がわかりましたか。そのどうしても救われない、否、救われる価値のない闇にも等しいあなたの魂を、あなたの御親のみ仏のみが、捨てはせぬぞ落しはせぬぞ、どうか安心してくれと叫んでいられます！」

と云い終ると、Dさんの口からおのずからなる称名念仏がほとばしり出た。やがて涙のままに起き上ったDさんの顔には、晴々しい微笑がただよっていた。

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて念仏申さんと思い立つこころのおこるとき、即ち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」

× × × × ×

まことに人がその魂の行衛も知らぬ黒闇々の深淵を臨み見て、しかもそれより身をひるがえすべきよすがもないことをさとる時、そこには潸然と涙あるのみ。無有出離の悲歎、地獄一定の悲涙、みなこれ救われざる自我相の自覚、全自我否定の実践から来る極みない悲痛である。

併しこの悲歎、悲痛の涙は人間のものであろうか、成程人は自己の一部分の否定に、不運に、無力に、無能に、貧窮に、屈辱に、すべてこの世のものの欠乏に悲しみの涙をそそぐことは出来る。併し人はこの世ならぬ彼岸の世界を望んで救われざる自らの姿を自ら歎き悲しむことは出来ぬ

刀が刀自身を切ることが出来ぬように、人は自分で自分の全体を否定し尽すことは出来ぬ。しかるに今人がその心霊の闇、逆謗の死骸に血の涙をそそぎ得るならば、その血涙こそ彼ならぬ如来の血涙である。はてしない業海にただよい行く人の姿に潸々と降りそそいで下さる哀愍の涙、この涙によって無始以来つくりと造るわが罪業を洗い清められる。

大悲とは如来の悲しみの謂である。されば地獄一定、無有出離の悲歎はすでにわが悲歎でなくて、如来御自らの悲歎である。かくてこそ地獄一定と全心霊をもって黒闇々の自己を体験せしめられた時、翻然一閃、闇を破る不可思議の世界に游出せしめられる。ここに信仰の奥義、宗教の不思議がある。

闇が消滅してから光が来るのでない、人間の合理性を超えた、暗のままなる光、光のままなる闇、悲しみのままなる悦び、悦びのままなる悲しみ、ここにこそ究竟の世界が開けている。以上はD君の感動深い体験を通じて私の胸に去来した想片にすぎない。

昭和四年十二月二十七日

世の人は皆近視眼だ

――不自由な生活をしている――

安波勲八

大正十五年

昨年の秋、丁度姪が疫痢様の病気で急死を遂げる日、赤松の妙見様の近所のお婆さんが眼瞼（まぶた）のタダレをよくして呉れと云ってやって来た、聞けば飲食店の主婦で至極あっさりした性質の持主である。例の如く看護婦に視力を計らせるとすこぶるうるさがる「わしは見え方は不自由はない、眼瞼のタダレさえよくして呉れればよいのじゃ」と云うのを無理になだめて、視力を計って見ると甚だ見え方が悪い。眼鏡は凸凹両方共きかぬと云う。そこで暗室で眼底をしらべると高度の近視による変化がある。この眼底の変化が単に近視によるものか、病的のものかを検べるため丁寧に診ると、お婆さん中々にうるさがる。

「わしは見え方は不自由はない、眼瞼のタダレさえよくしてくれればよい」と繰り返す。「あんたはそれでよかろうが、私がそれでは困るのだからマア辛抱して見せてくれ」と云って検べてみると、近視による変化丈けであるらしい。スキャスコピーで約二度半の近視を証明する。再び診察室の眼鏡台の前に座らせて両眼を同時に凹二度半の眼鏡をかけてみると驚いた。「これはどうか、あそこに居る人の顔が見える、時計も分るワ、これはどうか、こんなによく見える眼鏡があるなら眼瞼のタダレなんかどうでもよい」と大きな声で言う。診察室に居た大勢の患者は一せいにドッと笑う。「そんな欲のないことを云うものではない、見え方もよくしてあげれば、タダレもよくしてあげる」と笑い話をしながら、眼鏡を選定して処方を与えた。

この時私は成程そうだと思うた。世の中の人は皆近視眼で不自由な生活をしている。自分がよい他人が悪いで不平不満の生活をしている。善いことをしたい、他人に親切にしたいと云う理想と、絶対の善は出来ない、絶対の親切は出来ないと云う現実との矛盾に悩まされ不徹底なる不安の生活をしている。しかしこれは今更にはじまった病気でなく幼い時からの病気であるから、病気を病気とすら考えない、世の中を渡る道はこれがあたりまえだとしている。生

来の近視眼であるから、この位見えるのが当り前であると考えて、あえて不自由とすら感ぜぬのと同じである。

しかしこの人間性の矛盾を同情してたすけんと思し召し立ちける本願に遇うて安心立命の生活をしているものから見ると、サゾ不自由であろう、何とかして本願にあわせてあげたいと考える。眼医者に遇うて眼鏡をかけさせられた人から見ると、サゾ不自由であろう、是非専門医に診せて眼鏡をかけさせたいと思う。しかし御本人は平気なものだ

俺はこれでよいのだ、そんなに他人様に迷惑をかける様なこともせぬ、人生の不幸に遭うてもそんなにクヨクヨせぬ諦めがつく、俺はこれでよいのだ、いらぬお世話だ位に考える。このお婆さんも里人が「あなたは近視眼かも知れぬから眼医者に診て貰って眼鏡をあわせて貰ったら」と勧められたに違いないが、俺は見え方は不自由はないと退ぞけて居たのと同じである。

見えかたは不自由ないが眼瞼のタダレは気にかかる、毎日の日暮しには不自由はないが、どうも貧乏で困る、何とかしてお金をもうけたい、そして善知識に金もうけの法を相談に及ぶ。お婆さんが眼瞼のタダレを苦にして私の処へ来たところである。

善知識に遇うて金もうけの相談をして見るとこの人は金をもうけ得ないことが本当の病気ではない、その方は軽い本当の病気は憎い、可愛い、欲しいの三毒の煩悩に煮えて居る生活をしていることである。この病気をよくするために弥陀の本願にあわされてみると、

「これはどうか、こんな結構な世界があるのか、かような有難い日暮しの出来る世界があるのか、モウ金もうけなんかどうでもよい」という言葉が出るに相違ない。

御信心とは、眼医者から眼鏡をかけさせて貰うことだ。人間は近視眼である。近視眼には眼鏡をかけるとよく見えると、いくら説明を聞いてもかけて見なければ役に立たぬ。動機は何からであっても、理屈は知らぬでも一度眼医者から度の合った眼鏡をかけて頂くと、モウ眼鏡の味は忘れられぬ、眼鏡なくては不自由で仕方がない。一度お慈悲にあうて見ると一日でも一時間でもお慈悲なくては不自由で仕方がない。

「お慈悲にあわぬまではそんな不自由とも思わなかったが、一度お慈悲にあってみるとチョットもお慈悲なくては過ごされぬ」と、恩師東陽和上のお言葉が思い出される。

御信心とは本願に遇うことだ、自分の本体は何である、この者がたすかるのは仏の本願による外はないと云う道理を理解するだけでは詮ないことである（大正十五年稿）

念仏詩抄

木村無相

あかり

煩悩具足の
ボロ家に
ナンマンダ仏が
すみついて
あかりがついて
ボロ家の
おんボロボロが
見えまする

ナムアミダ仏と
見えまする

右〆(し)めて

阿弥陀さま
ご苦労
お釈迦さま

ご苦労
七高僧さま
ご苦労
ご開山さま
ご苦労
ご苦労一ぱい

右〆めて
ナムアミダ仏

信行両座

コレコレおまえは
行の座か

コレコレおまえは
信の座か

イエイエわたしは
願の座に

本願や名号

本願の海
念仏の波

ああ
本願や名号
名号や本願

もったいなし

もったいなし
もったいなし

生かされ生きて
ナムアミダ仏——

わたし

ナムアミダ仏は
如来さんの生きギモ
生きギモもろうて
生きてるわたし

わたしわたしと
いうけれど
生きギモもろうて
生きてるわたし

おおせの

おおせのままに
おおせのままに

ナムアミダ仏

響流十方

称えるときも
ナムアミダ仏
称えぬときも
ナムアミダ仏

ナムアミダ仏は
おやの呼び声
〃正覚大音
響流十方〃

称えるときも
ナムアミダ仏
称えぬときも

ナムアミダ仏

一番手

信心信心
いうけれど
弥陀の誓願
一番手

念仏念仏
いうけれど
弥陀の誓願
一番手

ナムアミダ仏
ナムアミダ
弥陀の誓願
一番手

信

信
信
信

大悲の願心
それこそが
信

信
信
信

称うれば

一遍上人
おん歌に
〃とのうれば
われもほとけも
なかりけり
ナムアミダ仏
ナムアミダ仏〃

無相（ムソウ）
ひそかに
〃とのうれば
われもほとけも
ありにけり
ナムアミダ仏
ナムアミダ仏〃

（四十六年十月六日）

池山先生を憶う

花田正夫

大阪で医を開業している福島君が、日赤の院長の小山君に会った時、

「お互に六高でドイツ語を池山先生から学んだが、その先生が亡くなってもう三十余年になるのに、毎年秋、洛西の浄住寺で先生を慕う会が催されている。存命中にどんなに世に知られていた人も、亡くなって何十年と歳月を経ると、遠ざかり、疎んじ、忘れられるのが世の常のならわしなのに、実に不思議なことだ。それにくらべると我々の生活は浮き草同様のはかなさだね」

と話したと、或日私に聞かせてくれた。それにつけてキリスト教で有名な内村鑑三氏の随筆だったと思うが、

「今までに人様のお世話を色々してきたが、その人が成功すると昔の苦境を忘れたいのか自分から遠のいていったそれとは反対に、何くれと面倒を見ていても失敗を続ける人々は、敷居が高くなったと云って段々来なくなった。ただ私の生涯で何時までも手を結ぶことが出来た人々は、聖書をすすめ、共に読んだ間柄だけであった」

というようなことを読んだ。福島君の話からこのことを思い出した。

池山先生は、人間の力の限界をよく御存知になっていて、唯真実にたのみ力となって下さる弥陀仏の本願の念仏一つをくりかえしまきかえし、御自身のご体験のままを述懐して下さったのである。

併もその先生は「親鸞弟子一人も持たず候」の仰せを随喜讃仰せられ、先生のお生活も自然にその再現であった。またお勧め下さるお念仏も「義なきを義とす」念仏であり「念仏ももうされ候」の念仏で、如来からたまわる、他力廻向の自然の念仏であった。それだから、先生に接すると弥陀・釈迦・七祖・聖人と、流来流去する法水に浴することが出来た。

憶うに先生の六十七年の御生涯は、久遠の法流に浮かぶ泡沫であって、先生の本来の面目は、尽未来際かけて、随

時、随処にまことのいのちとあらわれ、ひかりを放たれて転々と相続されることを確信する。こうした基盤に支えられて毎年秋の一道会が催されるのであり、その流れを汲む人々もそこに真実のよるべを頂いているのである。

さて七十に近い私の生活をかえりみます時、色々の御縁から親しくまじわらせて頂いた有縁の人々の思い出は多いが、あれも一時、これも一時で、別れればうとんじ、離れると忘れられて行った。昨年、郷里で卒業五十周年の同窓の集いがあった。私は出席出来なかったが其時の記念写真を送って貰った。ところが五十年も別れてすむと五年間も机をならべた友人の一人もそこに見出せない。その時身にしみて感じたことは、人生万事このようにして消える夢であり幻であるということであった。併しこうした夢幻の世にあって、別に努力したというのではないが、お念仏につながる御縁だけが何年も続いているという事実に驚かされた。互に不完全なもの同志であるから、仲良くもするが争いもする、何年も賀状も暑中見舞も出さないでいても、そういうことにさまたげられないで地下水のような交流がある。それは兄弟げんかをしても、何時かもとにひきもどされて行くうらに共通の親の支えがあるのと同じである。

それにつけても、池山先生がいよいよ死を自覚された時友子奥様が別れを惜しんで身も世もなく歎かれた際、

「しっかり念仏するんだ！
しっかり念仏するんだ！
どこまでも念仏でつながっているんだよ、
いいか、南無阿弥陀仏」

と述べられ、また地上でまとまった最後のお言葉は御顔をほころばせられて、とぎれ〳〵ながら

「何も残るものはない
何も残るものはない
ただ念仏だけが残ってくれる
えらいこったよ！
ありがたいこったよ！」

とささやかれた。

はじめの御述懐は、断ち難い恩愛のきずなをえにしとして、不滅不磨の「どこまでも念仏でつながっているんだ」の無碍道を、先生御自身に深く体感されてのほとばしりである。愛執愛着の断ち難い世とは云いながら、矢張り仮の宿で、夢のうちのちぎりに過ぎません。但しこの恩愛のきずなが御縁となって、永劫の手を結ぶことが出来れば、仮りの世がそのままとこ世を結ぶありがたい世と転ずる。次に、最後のお言葉にヒントを得て、浄住寺の名号碑が生れたのであるが、このお言葉にしばらく心をひそめよう。

先生の御晩年の大病の時の御述懐をおもう。

「生死の程もわからない、というよりは、十中の八、九むつかしかろうという見方が支配して、家中が憂愁の気配に埋もれていた。

自分も今度は駄目かと思った。今夜はまだこうして息をしているが、明日の朝はもう眼が閉じてしまっているのではないかと思った。そうだ、息は一つしかなかったのだなと、常には人の気付かないことにはじめて気付いたような気がした……。

〃即破無明闇〃私の行方は闇である。ことに近く死と面と向っては、真黒闇の闇である。そのとき忽然としてひらめく〃ただ念仏〃私には巨人の腕にかざされた松明としか思われなかった。実にこのひらめきこそ無明長夜の灯炬であり、即破無明闇は、その光芒（こうぼう）のとどく限りである……」

と。御自身の死を前に黒闇々の中にうかび出るお念仏、その光芒は行方の闇を破って、身にふりかかる一切の問題に随順して乗り越えて行かれるお姿がまざまざと見える。

ことにいよいよとなると名利よりも恩愛の情の切ないものがある。しかし、親子、兄弟、夫婦、師友、のきずなも所詮はかぎりあるもの、やがて切られ、消されて行くものであるが、最後の最後までのこり、夕陽が沈み宵闇がせまる時、星や月が夜空に光を放つように、お念仏のたのもしさがいよいよその光芒を放って下さる。

先生のいのちが、御念仏である、先生即念仏、念仏即先生と、先生がお念仏と融けて、いける念仏の尽未来際かけてのおはたらきがあらわれる。

「ただ念仏だけがのこる
えらいこったよ
ありがたいこったよ」

私共もまた、はじめあって、おわりなき御名に導かれて無量光明土にかえらせて頂き、普賢菩薩の徳を恵まれるのである。

先生のお歳を越えて馬齢を重ねさせていただいた今頃、「ただ念仏して」に開眼され「ただ念仏のみぞのこれり」を御身にかけてお教え下さった大恩がただごとならず身にしみ、御名の中に先生の温いおいのちにふれ、その光にみちびかれ、まもられながら、身にもつ私の業報を越え〳〵させていただくばかりである。

先生の生誕百年を迎え、追慕の情いよいよ切に、筆も涙にくもり勝ちであるが、先生の生死を出でられた道光を身にうけつゝ、有縁の方々と浄土の旅をたどらせて頂きたいと願わずには居られない次第である。

（十月八日　一九七二年）

ともしび

聚墨生

十方恒沙の諸仏は　極難信ののりをとき
五濁悪世のためにとて証誠護念せしめたり
（小経和讃）

先日、米国からの留学生の人たちと仏法讃仰の機縁をもった。その時、親鸞聖人の仰言る大信心という言葉をどう英訳したらよいかが問題となった。相対的な自力をもととした信仰の言葉はあるが、月光で月影を仰ぐように、仏心のまことがしみこんで、自然に開発される信心、絶対他力の大信心に相当する英語がないとのことであった。二元対立し、相対性原理のみに終始する国では、そうした言葉のないのは当然であろう。あだかも、光のとどかない深海の魚に目がないのと同様である。

さて釈尊が相対差別の世にあって、絶対無碍の光明を感得され、さばきとへだての心しかない私共にその光明をとどけて下さるにはどんなにか御辛労が多かったことであろうか。仏伝によると三十五歳に成道された釈尊は、この絶対真実の道を説いても、信ずる者もなく、かえってそしりあざわらうのが関の山であろう。むしろ何も説かないで、このまま世を去ろうかとさえ思われたときく。この難事を点滴が岩をも穿つように、くりかえし、まきかえし身をもって、その不思議な真実心を注ぎかけて下さり、十方の諸仏はこれを護念し、証明し、讃仰して下さった海山の御恩のほどが年と共にひとしを身にしみることである。

（四十七年六月七日）

ひとえに弥陀の御催しにあずかりて念仏申し候人を
わが弟子と申すこと極めたる荒涼のことなり
（歎異抄六章）

「子供を育てるのでなく、子供は育つものである、親はそれを助けるだけ」と西哲は警告している。「病気を医師が治すのでなく、治る力は患者が持っている。医師はその

力を助長し、障りを除くだけだ」と医聖は語る。「人はそれぞれに貴い智恵を具えている、私はそれが生まれ出るのを手伝う助産婦である」とソクラテスは云っている。

聖人は、在世中から沢山の人々の光りとなって下さっているのに「親鸞弟子一人も持たず候」と仰言って、ただ仏の加威力（かびりき）の自然の働きを渇仰せられ、仏縁ありがたく念仏申される人々を、御同朋、御同行とかしずかれている。何とスッキリした御心境であろうか。

両親の慈愛を存分にうけている子はおおらかである。心身ともに仏心の大悲に浴された聖人のこのおよろこびの姿は、大空に悠々と去来する白雲のおもむきである。

（四十七年七月十六日）

生死の苦海ほとりなし久しく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ乗せて必ず渡しける
（竜樹和讃）

長年、聞法しながら疑情の晴れぬことを苦にしていたK君が、終戦後に突然たずねて来て

「僕は軍医として四年間戦場にいてたびたび危険に遭ったが、其刹那だけヒヤッとするが、後はケロリ。鈍感な僕には無常さえもさとれないんだなあ！」

と長歎息して、一句を示し

紅葉せずこのまま散るか散り行くか

「久しく法縁に恵まれながら、紅葉せずに朽ちはてるのかなあ！」

と涙のこもる告白を聞いた。ここが有名な二河白道の一地点、進むことも、退くことも、止まることも出来ない、人間の力の極限であり、ニイチエの所謂「人間の経験し得る最大なもの、見下げはて」の体験である。

ああ、ここに弥陀仏の哀々とした招喚の声が集中し、釈尊の切々たる勧信がある。

翌朝、K君は満面に笑みをたたえて

目さむれば秋陽一杯あたりおり

の一句を念仏しながら示してくれた。

（四十七年八月二十七日）

雲の峰

（信を行く旅人より）

疲れたる旅人のあふぎみる大空に
さまざまの姿してわきあがる雲の峰
わきあがりやがてまたくずれゆく雲の峰
あわれそのさだめなきまどはしの姿かな
わがたどる運命のはてしなき旅の空
われはまた日毎見るたのみなき雲の峰

あとがき

秋も更けて行きます。白井成允先生から頂いた短冊、

さにはべのもみぢの萩の下蔭に
　小鳥あそべり　南無阿弥陀仏

と、福島政雄先生から頂いた

ふとひらく教行証の信のまき
　身にしみて誦す初秋のあさ

をならべ掲げて、みのりの秋をすごして居ります。

慈光さんさんとあまねくそそぐ中の御生活の白井先生を偲び、教行信証の信のまきに、善導大師の散善義を存分に御引用されて、機の深信を徹底してお知らせ頂く聖人の御信味に福島先生が深く感動せられて居られます御姿をしのび心のうるおいを頂いております。

○

近角先生の病床慰問の書簡は、現在長い病床生活をせられます法友が居られますし又弘共夫婦も病身でおりますこととて、度々拝誦させていただいておりますので、この際巻頭に頂きました。世の常の慰問と異なり、先生を通じて如来聖人のみ心があふれ、身にしみますことであります。

福島先生の聖人の信仰と道徳は、信生活において大切に読まして頂いております。頭で考えられたものでなく、実生活の上に信嘗して下さるもので、世にまれなみおしえとありがたく拝誦しております。

向島諦宣様は弘共の京大の先輩で、四十余年の信交をさせて頂いております。この原稿も四十年も前のものでありますが、春には春の花、秋には秋の花と、其時々々でなければ咲かぬもの、しかも二度と繰り返せぬ法味であります。

木村無相さんは夏ばてで弱られましたが段々恢復とのこと、無理の出来ぬ体力、大切にと祈念し、その生活の中からホロリホロリと念仏詩がこぼれ出ますことを尊くありがたく頂いております。

弘自身、池山先生の御歳をこえて、幸に御生誕百年を迎えますについて、法の永遠ないのちを先生から感得させて頂きましたままを述べました。愛執、愛着の仮りの宿にあって、泡沫の生を続けながら、そこに永遠にひらける光明を仰ぎ「末通るまことのいのち」と、「ただ念仏のみぞまこと」をあたらしく知らされますことであります。

御案内

○毎月第一、二、三日曜午後一時半
一道会例会
南区駈上町二ノ八八　一道会館

○市電、新郊通り一丁目下車
毎月二十四日午前午後、教西寺法話会
昭和区小桜町、教西寺
市電、御器所通り下車
市バス、北山町下車

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　花田　正夫
　電話八二一局七〇三七番

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
　吉野穂志郎

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　慈光社

振替口座　名古屋一〇四七〇番

那便番号四五七

慈光　第二十四巻　第十一号　昭和四十七年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可